全衆議院議員479人アンケート第二弾

被災地へ足を運んだ政治家は？

本誌は6月15日前後に、全衆議院議員479人にアンケートを行い、震災後、被災地へ出向いたかどうかを調査した。彼らの目に、現地はどう映ったのか？

取材／文・オフィス三銃士

東日本大震災のあまりにも大きな被害状況に、我を失ってしばらく茫然自失してしまった――それが多くの日本人の現実ではなかっただろうか。その驚愕から立ち直り、被災地への募金や東北の産物購入、あるいはボランティアに参加したりというのが我々にできることだった。

では、こうした大災害のときにこそ本領を発揮してほしい政治家はどう行動していたのだろうか？　その一端を探るべく、本誌は全衆議院議員にアンケートを送った。質問は単純で明快――大震災発生後、被災地へ足を運んだ回数と行き先だ。有効回答は7月13日時点で全479名中62人。もちろん、アンケートには答えていないが、実際には被災地に行ったという方も多いだろう。今回はアンケートに回答してくれた議員を掲載する。

なかにはすでに10回以上も現地に足を運んでいる議員もいるにはいるが、回答者の多くが数回という結果だった。もちろん回答していない方のなかにはまだ行ったことすらない人もいるだろう。回数が重要なのではない。被災地の現実を見て、どう行動したか？　である。日本の未来につながる行動を期待したい。

衆議院議員 被災地訪問アンケート結果（表記はアンケートに準じています）

議員名	訪問回数	訪問地
民主党		
網屋信介	2	大船渡市、陸前高田市、釜石市
泉健太	5	全県各地
井戸まさえ	6	宮城県、岩手県、福島県、山形県
稲見哲男	6	双葉郡8町村仮役場、ビッグパレット福島ほか
太田和美		※選挙区が被災地のため数えきれない
大西健介	2	塩竈市、大船渡市、陸前高田市
奥村展三	2	陸前高田市
小沢鋭仁	2	名取市、仙台市、石巻市
加藤学	2	石巻市、南三陸町
神山洋介	2	宮城県、仙台市
川内博史	2	南相馬市、飯舘村、Jヴィレッジほか
京野公子	3	陸前高田市、南相馬市、飯舘村
小林興起	3	岩手県、福島県
小林正枝	2	気仙沼市
佐々木隆博	1	大船渡市、陸前高田市、気仙沼市、名取市
柴橋正直	3	宮古市、福島市、郡山市、いわき市ほか
杉本かずみ	1	岩手県、山田町
高邑勉	(37日)	南相馬市を中心に福島県
玉城デニー	4	南相馬市、いわき市ほか
辻恵	3	岩手県、福島県
寺田学	1	福島県
道休誠一郎	2	岩手県、宮城県
中川治	4	3県4都市
長島一由	5	福島県
野田国義	1	飯舘村、伊達市、南三陸町ほか
初鹿明博	7	岩手県、茨城県、福島県、宮城県
平山泰朗	5	岩手県、宮城県
福田昭夫	2	宮城県、岩手県
藤田憲彦	3	大洗町、気仙沼市、南相馬市
本多平直	2	宮城県、岩手県
松崎公昭	3	宮城県、千葉県
宮崎岳志	2	仙台市、石巻市、東松島市、塩竈市ほか
若泉征三	NA	NA
自民党		
伊東良孝	1	宮古市、山田町、大槌町、釜石市
今津寛	3	岩手北部、いわき市、仙台市、松島町
加藤紘一	2	大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市
金子恭之	1	仙台市荒浜、石巻市
北村茂男	2	宮城県、福島県
柴山昌彦	1	福島県
竹本直一	NA	NA
田野瀬良太郎	1	福島県
平沢勝栄	1	石巻市、女川町ほか
松浪健太	1	大槌町
公明党		
大口善徳	3	仙台市、登米市、多賀城市、大槌町ほか
遠藤乙彦	2	陸前高田市、気仙沼市、南三陸町、女川町ほか
社民党		
阿部知子	9	気仙沼市、石巻市、仙台市、南相馬市ほか
重野安正	3	岩手県、宮城県、福島県
照屋寛徳	1	仙台市、石巻市、松島町
中島隆利	2	宮古市、石巻市、仙台市、名取市
服部良一	5	南相馬市、飯舘村、女川町、釜石市ほか
吉泉秀男	18	八戸からほとんどの被災地
共産党		
赤嶺政賢	3	二本松市、郡山市、仙台市、東松島市ほか
笠井亮	2	福島県、千葉県
穀田恵二	3	宮古市、釜石市、陸前高田市、石巻市ほか
佐々木憲昭	1	岩手県
志位和夫	3	飯舘村、南相馬市、福島市、千葉県旭市ほか
高橋千鶴子	NA	八戸市、陸前高田市、大船渡市、宮古市ほか
みんなの党		
柿沢未途	7	宮古市、釜石市、大船渡市、陸前高田市ほか
たちあがれ日本		
平沼赳夫	1	宮城県、福島県各地
新党日本		
田中康夫	7	南相馬市、相馬市、陸前高田市、大船渡市ほか
無所属		
石川 知裕	5	陸前高田市、大船渡市、石巻市、釜石市ほか
城内 実	1	岩手県、宮城県

「NA」は具体的回答なし（No Answer）

調査の方法

全479名の衆議院議員事務所にアンケートを流し、電話でファックスでの回答を依頼。7月13日時点で回答を寄せられた議員の回答を記載した。聞いた質問は以下の通り。

Q.3月11日の東日本大震災発生以降、地震・津波の被災地へ行かれましたか？
・行かれた方に対し、1.その回数は、2.訪問された場所は

田中康夫的〝ボランティア〟論

偽善と紙一重の行為でも経験する価値がある

16年前、阪神淡路大震災のとき、大阪で購入した50ccバイクの後部座席にくくりつけたプラスチック箱とリュックサックで物資を配り歩いた田中康夫氏。半年間被災地に通い、避難所やテント村を回ったベテランボランティアは、今回の大災害で何を思ったのか。

田中康夫
（たなか・やすお）1956年生まれ。衆議院議員、新党日本代表、作家。2000年より長野県知事を2期務める。07年参議院議員、09年、兵庫8区（尼崎市）から総選挙に立候補し当選。公式ブログ www.nippon-dream.com/

ボランティアを通じて〝意欲〟を持ってもらう

「ボランティア」といっても、何か特別なことだなんて考えない方がいい。出来ることを、出来る人が、出来るときに、出来るやり方でやるのが基本なんだから。それはお金であったり、労働であったり、知恵であったり……そう考えてみると、本当に色々なボランティアの方法があるということがわかるんじゃないかな。

今回のような大災害を被った人たちにとって、先ず大切なのは「衣食住」。でも、その次には、それが「〝意〟職住」に変わるというのが僕の持論。つまり、意欲、職業、住居です。なかでも僕が大切だと思うのは「意欲」。「意欲」を持ってもらうために自分たちが出来ることをするのがボランティアなんですよ。

阪神淡路大震災のときに、週に5日は「現地」へ通おうと努力した僕が実感したのは、そのことでした。

「アジアンキッチン」と協力して温かい食事を提供した

偽善や後ろめたさを超えまず行動する

最初は、50ccバイクに積めるミネラルウォーターや下着じゃ何にもならないかも、という気持ちもあった。でも、実際行ってみないことには何も始まらない。そして、現地でいろいろ閃いた。こんなものがあったらいい、こんなことが求められている、と。そしてそのうちに、いろいろなものを配ったり炊き出しに協力したりしているのは「呼び水」なんだと気がつきました。これは被災した人たちが、たとえば、自分から何かを始めようという気持ちになってもらうために、僕らは、いまこうしているんだということです。

だいたい、ボランティアというものを、地味な精神論で考えちゃいけません。所詮、それは偽善や後ろめたさと紙一重の行為なんだから。だって、一端現地を離れれば、自分たちにはゆっくり休める寝床も美味しい食事も保証されているという現実がある。被災地の人たちを助けに行ってあげるつもりでも、実際はそんな自分たちが教えられることが多いし、自分というものを新たに発見する部分の方が大きいと思います。けっきょくボランティアをするのはある種の「相互扶助」のようなものなんです。

被災した仙台荒浜郵便局前で

現場を見に行くだけでは失礼かも……、そんなことはありません。ほんの少しでも興味があるのなら、まずは行ってみること――無手勝流や回り道でもいい、自分が反応したことをやってみる。そこからきっとさまざまなことが開けますよ。

気仙沼など、行く先々で街角の人に声をかける